

〈論文〉

教員免許状取得を目指す学生における子どもと関わる課外活動の効果

—正課の学習との結び付けに着目して—

石本雄真・大谷直史・柿内真紀

The Effects of Extracurricular Activities with Children on University Students during Initial Teacher Education

-Focusing on Linking with the Formal Curriculum-

ISHIMOTO Yuma, OOTANI Tadasu, KAKIUCHI Maki

キーワード：教職課程，課外活動，ボランティア

Key Words: Initial Teacher Education, Extracurricular Activities, Volunteer

1. 問題・目的

近年、教員養成課程における現場体験が重視されており、各大学とも教員免許状取得を目指す学生にボランティア活動等を促す傾向がみられる。その背景として、文部科学省の教育職員養成審議会（1997，1999）や中央教育審議会（2006，2012）が教員養成課程における学校現場での体験の重要性を繰り返し指摘していることが挙げられる。それらの答申においては、教員をめざす学生が学校現場での体験を行うことによって、自信をもつこと、不安をなくすこと、生徒指導力を向上させることが期待されている。

教員免許状取得を目指す学生に現場体験を促す動きがさまざまな大学でみられることに並行して、現場体験の中でも特にボランティア活動を行うことによる学生の成長に焦点をあてた研究がみられるようになった。これらの研究の多くは、大学が推進するボランティア活動に参加した学生の成長を明らかにしようとするもので、多くは参加後のみに調査を行って参加の効果を検証するものである。例えば、姫野（2006）は不安の解消や子どもとの関わり方の変化について量的な調査による効果を示すとともに、質的な調査によってその他の学習効果についても示し、授業補助の有無といった活動内容の違いによる効果の差異も見出している。進藤・勢田・澤登・角田（2009）は、学生の感想から教職に就く気持ちを高める効果があったことを示しており、嶋田（2012）は自由記述による調査によって、子どもや教育現場、教師の仕事の理解という面や、学習指導、生徒指導のあり方などの面で効果があったことを示している。これらはいずれも参加による効果があったことを示しているが、参加後のみの調査であるため参加した学生の効果の認知のみに頼るものである。参加した学生が効果があったと認知することは、今後の参加への動機づけとなるとともに実際の能力の向上にもつながっていくことが期待できるため重要な点であると考えられるが、学生が持つ能力や態度が活動への参加によって実際に変化したのかどうかについては明確ではない。その点、参加前後で調査を行いその変化を検討しているという意味において若尾・緩利（2014）はより変化を正確に捉えていると考えられるが、子ども観、教職志望動機、同一性地位、援助規範、共感性を調査した中で参加前後に変化したものは援助規範のみであり、大きな変化がみられなかったことを示している。このことから、学生の効果の認知は実際の学生の能力や態度の変化よりも過剰である可能性が考えられる。ただし、若尾・緩利の研究で調査対象となった学生のボランティア活動参加は、姫野や進藤ら、嶋田による研究で調査対象となった学生のボランティア活動参加よりも短期間のものであり、その活動の短さが効果の少なさに影響している可能性もある。また、参加前後の調査で変化が示されたとしても、それらがボランティア活動参加による効果だけではない可能性にも留意が必要であるといえる。教員免許状の取得を希望する学生は正課の授業においても学習指導や生徒指導の講義を受けており、当然ながらそれらによる成

長も考えられる。また、正課外でもボランティア活動だけではないさまざまな活動を行っており、それらによる成長も考えよう。このことから、本来であればボランティア活動に参加していない学生との変化の比較も必要である。

一方、ボランティア活動を含む正課外活動による発達を捉えようとする研究の文脈においては、活動への参加の有無といった指標だけではなく、活動の広さ(参加している活動の種類)、活動頻度(活動回数や活動時間)、活動期間、活動への関与度の4側面から活動経験を捉える必要があるとの提案がなされている(Bohnert, Fredricks, & Randall, 2010)。実際に複数の側面から課外活動への参加経験を捉え青年の発達との関連を検討した研究では、側面ごとに異なる関連が示されており、活動の広さと活動頻度では活動の広さが青年の発達にとって適応的な影響を与えることが複数の研究において主張されている(Rose-Krasnor, Busseri, Willoughby, & Chalmers, 2006; Busseri, Rose-Krasnor, Willoughby, & Chalmers, 2006; 原田・石本・王・山根・日潟・田仲, 2016)。さらに、上記の4側面以外の側面が発達に影響を与えることを示唆する研究もみられる。例えば、サービス・ラーニングにおける学習に関する研究では、活動に対するリフレクション(振り返り)の重要性が指摘されている(河井・木村, 2013; Hatcher, Bringle, & Muthiah, 2004)。これらはいずれも課外活動への参加経験を単独で捉えるものであるが、正課の学習や私的な活動とのバランスから課外活動への参加経験と大学生の発達との関連を捉えようとするものもみられる(溝上, 2009; 山田・森, 2010)。それらの研究では、課外活動だけを熱心に行うのではなく、正課の学習や私的な活動とのバランスが取れていることが青年の発達にとって重要であることが示されている。さらに、バランスだけではなく、正課の学習と課外活動の結び付けが重要であるとの指摘もみられる。具体的には、正課の活動と課外活動のように複数の異なる活動の間を行き来しながら、それらの活動における学習を結び付けている学生はそうではない学生よりも、さまざまな知識や技能の習得につながっていることが示されている(河井・木村, 2013; 河井, 2014)。ここでの結び付けと発達との関連はサービス・ラーニングに関する文脈で検討されているが、一般的な課外活動においてもその関連は示されている(石本・原田・日潟・王・田仲・山根, 2016)。このような課外活動と発達との関連を捉えようとする研究における知見から、教員免許状取得を目指す学生のボランティア活動参加による成長を捉えようとする研究を再考すると、活動参加経験の捉え方や活動と正課の学習との関連を捉えることにおいて十分ではないといえるであろう。

このように、教員免許状取得を目指す学生がボランティア活動等に参加をすることによってさまざまな面における成長が期待され、全国の大学においてボランティア活動等への参加を促す動きがみられる一方で、実際に参加によってどのような成長がみられるのかということについては十分に検証が行われていない状況であるといえる。今後の研究においては、ボランティア活動等への参加学生と非参加学生の両者を対象に参加前後での調査を行うとともに、複数の観点から参加のありようを捉え、さらには正課の学習と活動とのバランスや結び付けといった観点からも検討を行うことが必要であるといえる。しかしながら、これらの課題を一度に解決する調査を行うことは非常に困難である。このため、上記の課題を意識した上で少しでもこれらの課題を解決できる調査を行い、それらの知見を積み重ねていくことが有効であるといえよう。

本研究では、教員免許状取得を目指す学生が行う課外活動の効果が明らかになっていない現状を鑑み、課外活動の効果についての検証を行う。その際、活動に参加したかどうかというだけではなく、正課の学習、特に教職課程との結び付けを行っているかという点に着目して調査を行う。この点に着目する理由として、活動への参加の促し以外での学生への支援の可能性が挙げられる。上述のように、課外活動への参加経験と発達との関連を捉えようとする研究においては、活動の広さや頻度、期間等についても捉えることが必要であることが指摘されている。しかしながらこれらが学生の発達、成長に関連するとして、学生の成長、発達の促進を支援しようとする場合、その支援は参加を促すことになるといえる。冒頭に記したように、活動の参加を促すことは近年さまざまな大学ですすでに行われており、新しい支援には結び付きにくい。また、活動と正課の学習や私的な活動とのバランスといった点に着目した研究ではバランスが取れていることが重要であると示されているが

(溝上, 2010), 教員免許状取得を目指す学生に課外活動を促すという文脈においては, 参加のし過ぎによって他の領域とのバランスを崩してしまうことはあまり問題となっておらず, 現状においてバランスを取るということはやはり活動への参加を促すということになる。一方で, 課外活動での経験と教職課程の学習との結び付けを行っているかという点で結び付けが学生の成長, 発達と関連することが示されれば, 教職課程の授業内において課外活動における経験との結び付けを促したり, 課外活動における振り返りで教職課程の学習との結び付けを促したりすることが新たな支援策として提供できると考えられる。なお, 文部科学省は学校現場での体験の重要性を指摘しているが, 本研究では学校現場に限定せず, 子どもと関わる課外活動全般を対象として調査を行う。また, 課外活動の種類についても多くの先行研究ではボランティア活動を対象とするが, 本研究ではボランティア活動に限定せず, さまざまな課外活動を対象として調査を行う。

2. 方法

調査対象者・調査時期・調査方法

鳥取大学で教員免許状の取得を希望する学部生1~4年生を対象とし, 1年生は2016年10月, 2年生は2016年5~6月, 3年生は2016年4月, 4年生は2016年10月に調査を実施した。1, 3, 4年生については教員免許状の取得を希望する学生が必ず履修する授業において調査を実施した。2年生については教員免許状の取得を希望する学生を対象とした個別面談の時間の前後に調査を実施した。なお, 農学部については他学部が3年生で履修する授業を4年生で履修するため, 3年生のデータが欠損している。

実施の際, 調査結果については教育および研究に利用することを書面で説明し, 研究への利用を希望しない場合はその旨記述すれば利用しないことを明示した。調査においては学生番号の記入も求めたが, 研究での利用の際は個人を特定できる形でデータを利用することはないと明示した。

調査内容

子どもと関わる課外活動への参加状況 子どもと関わる課外活動に参加しているかどうかを, 「参加している」, 「参加していたことがあるが今は参加していない」, 「参加したことはない」の3件法で尋ねた。

その他の課外活動への参加状況 子どもと関わる課外活動への参加状況に対する問いで, 「参加していたことがあるが今は参加していない」, 「参加したことはない」のいずれかの回答を行ったものに対し, その他の課外活動に参加しているかどうかを「参加している」, 「参加していたことがあるが今は参加していない」, 「参加したことはない」の3件法で尋ねた。なお, ここでのその他の課外活動とは, 個人で行っている活動は含めないこととし, 例としてクラブ, サークル, スポーツチーム, 各種文化・芸術系団体, ボランティアグループ, NPO, NGO, ベンチャー企業などを示した。

教職課程と課外活動の関連付け 教職課程と課外活動の結び付けの程度について, 「教職課程で学んだ内容が課外活動の役に立っている」, 「課外活動での経験が教職課程の学習の役に立っている」, 「教職課程の学習内容と課外活動の内容は関連している」の3項目で尋ねた。それぞれどの程度あてはまるかを, 「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」までの5件法で回答を求めた。なお, 子どもと関わる課外活動およびその他の課外活動のいずれにも参加していない者はこの問いには回答しないよう指示した。

教師効力感尺度 春原(2007)の「教育学部生用教師効力感尺度」を用いた(26項目)。「学級管理・運営効力感」, 「教授・指導効力感」, 「子ども理解・関係形成効力感」の3つの下位尺度が含まれる。それぞれどの程度あてはまるかを, 「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」までの5件法で回答を求めた。

教師能力達成感 鳥取大学として教員を目指す学生に求める能力5つについてそれぞれ4項目で測定する尺度を実施した(20項目)(Table1)。それぞれどの程度あてはまるかを, 「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」までの5件法で回答を求めた。

Table1 教師能力達成感の項目一覧

I. 学習指導と生徒指導の両面を視野に入れた子ども対応ができる教員（学習指導と生徒指導）
子どもに十分な学力や生活に必要な能力を身につけさせる指導ができる
子どもの学びへの興味・関心を引き出す工夫ができる
子どもの心身の問題に適切に対処することができる
子どもの心身の問題を予防するための根拠に基づいた取り組みができる
II. 人間の生涯発達を視野に入れた子ども対応ができる教員（生涯発達）
子どもがこれまでの生活や学習で身につけた内容を活かした学習指導を考案できる
現在の学習の内容が将来の生活や学習にどのように関連するのかを子どもに意識させることができる
現在の子どもの問題が過去の問題や将来の問題とどのように関連するのかを意識して生徒指導を行うことができる
人の各発達段階における特徴を理解している
III. それぞれの子どもの特性に応じた配慮や工夫のもと、教科指導、生徒指導ができる教員（特性への対応）
家庭環境による発達の違いを理解している
さまざまな障害や疾病、学習や心身の発達の個人差について理解している
子どもの特性に応じた指導の工夫を考えることができる
さまざまな特性をもった子どもがいることを前提とした授業づくりや教室環境づくりができる
IV. 自らの専門以外にも興味関心を持ち、積極的かつ継続的に学びを進めることができる教員（興味関心、継続性）
自分が教員免許取得を目指す校種や教科以外の教育にも関心がある
授業時間外にも自ら教職に関する学習を行っている
教員になった後も継続的に学習を続けていきたいと思う
教職との関連を意識しながら、課外活動（部活、サークル、バイトなど）や日常生活でのさまざまな活動に取り組んでいる
V. 同僚、学校内外の教員以外の専門職、保護者と連携することのできる教員（連携）
教員を目指す他の学生と協力して学習を進めている
教員が教員以外の専門職と効果的に連携する方法がわかる
子どもへの効果的な指導のために、保護者とのどのような連携が有効であるかがわかる
日常生活において困ったことがある際に、誰かに助けを求めることができる

調査回答者

1年生161名（地域学部100名，工学部36名，農学部25名），2年生122名（地域学部87名，工学部20名，農学部15名），3年生90名（地域学部76名，工学部14名，農学部0名），4年生63名（地域学部29名，工学部23名，農学部11名）であった。なお，1年生対象の授業を履修する他学年の学生がその授業における調査に回答することがあったが，そのような想定される学年以外の学年の学生のデータについては回答者に含めなかった。他の学年を対象とする授業についても同様であった。1，2年生については教員免許状取得を目指す学生ほぼ全員，3年生は教員免許状取得を目指す学生のうち農学部以外のほぼ全員，4年生は教員免許状取得を目指す学生のうちの一部の学生のデータが得られた。

得点集計・分析方法

教職課程と課外活動の関連付けについては，3項目の平均値を得点とした。教師効力感尺度については，下位尺度ごとの項目平均値をそれぞれの下位尺度得点とした。教師能力達成感については，鳥取大学として教員を目指す学生に求める能力5つに対応する項目群を下位尺度とし，項目平均値をそれぞれの下位尺度得点とした。

学年ごとにサンプルが異なるため学年間の比較は行わず，基本的に分析は学年別で行った。

3. 結果

子どもと関わる課外活動への参加と正課と課外の関連付け

子どもと関わる課外活動への参加状況による教職課程と課外活動の関連付けの相違について検討するため，学年ごとに分散分析を行った（Table2）。その結果4年生以外の学年において有意差が示されたため，多重比較を行ったところ，1年生においては参加群と不参加群の間，2年生においては参加群と過去参加群および不参加群のそれぞれの間有意な差が示された（Table3, 4）。有意な差が示された群間においては大きな効果量も示された。3年生については不参加群がないため，参加群と過去参加群との間に有意な差が示されたこととなる。

Table2 教職課程と課外活動の関連付けにおける分散分析結果

	1年生			2年生			3年生			4年生		
	F	p	η^2	F	p	η^2	F	p	η^2	F	p	η^2
教職課程と課外活動の関連付け	10.23	.000	.17	9.84	.000	.20	41.04	.000	.38	1.09	.347	.07

Table3 教職課程と課外活動の関連付けにおける学年別平均値

	1年生			2年生			3年生			4年生		
	n	平均	SD	n	平均	SD	n	平均	SD	n	平均	SD
教職課程と課外活動の関連付け 参加	37	3.49	.94	32	3.94	1.08	34	3.96	.73	13	3.95	.86
過去参加	22	3.12	.82	18	3.02	.80	36	2.81	.76	16	3.52	.91
不参加	41	2.54	.98	30	2.83	1.10				5	3.33	1.22

Table4 教職課程と課外活動の関連付けにおける学年別の群間比較の結果

	1年生		2年生		4年生	
	p	d	p	d	p	d
教職課程と課外活動の関連付け 参加—過去参加	.319	.41	.009	.93	.450	.48
参加—不参加	.000	.99	.000	1.02	.436	.63
過去参加—不参加	.052	.63	.819	.19	.920	.19

Table5 学年別の教師効力感に関する多変量分散分析結果

	1年生			2年生			3年生			4年生		
	F	p	η^2	F	p	η^2	F	p	η^2	F	p	η^2
教師効力感	1.33	.245	.03	1.66	.134	.05	1.95	.127	.07	1.29	.269	.06

Table6 学年別の教師能力達成感に関する多変量分散分析結果

	1年生			2年生			3年生			4年生		
	F	p	η^2	F	p	η^2	F	p	η^2	F	p	η^2
教師能力達成感	3.59	.000	.11	3.93	.000	.15	5.68	.000	.26	.88	.550	.08

Table7 学年別の教師能力達成感の下位尺度における分散分析結果

	1年生			2年生			3年生			4年生		
	F	p	η^2	F	p	η^2	F	p	η^2	F	p	η^2
学習指導と生徒指導	.48	.620	.01	.18	.834	.00	1.23	.270	.01	1.26	.291	.04
生涯発達	1.63	.200	.02	1.35	.263	.02	2.26	.136	.03	1.55	.221	.05
特性への対応	1.22	.297	.02	.17	.844	.00	12.80	.001	.13	2.87	.065	.09
興味関心, 継続性	9.86	.000	.12	13.66	.000	.19	17.88	.000	.17	1.46	.241	.05
連携	2.97	.054	.04	.61	.546	.01	3.80	.055	.04	2.40	.100	.08

課外活動への参加と教師効力感

子どもと関わる課外活動への参加状況による教師効力感の相違について検討するため、学年ごとに多変量分散分析を行った。その結果いずれの学年においても有意差が示されなかった (Table5)。

課外活動への参加と教師能力達成感

子どもと関わる課外活動への参加状況による教師能力達成感の相違について検討するため、学年ごとに多変量分散分析を行った (Table6)。その結果4年生以外の学年において有意差が示され、下位尺度ごとの分析では、3年生における特性への対応、1, 2, 3年生における興味関心, 継続性において有意差が示された (Table7)。多重比較を行ったところ、興味関心, 継続性について1, 2年生いずれの学年においても参加群と過去参加群および不参加群のそれぞれの間に有意な差が示された (Table8, 9)。有意な差が示された群間においては大きな効果量も示された。3年生については不参加群がないため、特性への対応および興味関心, 継続性について参加群

Table8 教師能力達成感における学年別平均値

	1年生			2年生			3年生			4年生			
	<i>n</i>	平均	<i>SD</i>	<i>n</i>	平均	<i>SD</i>	<i>n</i>	平均	<i>SD</i>	<i>n</i>	平均	<i>SD</i>	
学習指導と生徒指導	参加	36	10.72	2.88	31	11.23	2.97	34	12.03	2.43	13	13.54	1.39
	過去参加	44	11.41	3.23	37	10.97	2.82	54	11.35	2.99	30	12.97	2.30
	不参加	65	11.02	3.27	48	11.35	2.91				15	12.13	3.09
生涯発達	参加	36	10.33	3.42	31	11.19	2.70	34	12.41	2.34	13	14.46	1.90
	過去参加	44	11.41	3.23	37	12.03	2.84	54	11.52	2.93	30	13.20	2.44
	不参加	65	11.43	2.90	48	12.21	2.73				15	13.00	2.75
特性への対応	参加	36	11.92	2.84	31	13.32	3.06	34	14.71	2.46	13	15.38	1.39
	過去参加	44	12.84	3.35	37	13.59	2.65	54	12.67	2.69	30	13.93	2.45
	不参加	65	12.88	3.16	48	13.23	3.01				15	13.60	1.88
興味関心、継続性	参加	36	15.89	2.21	31	16.16	2.35	34	15.50	2.16	13	15.15	2.70
	過去参加	44	14.27	2.89	37	13.68	2.26	54	12.94	3.07	30	14.00	3.10
	不参加	65	13.29	3.05	48	13.52	2.41				15	13.20	3.14
連携	参加	36	13.06	2.84	31	13.58	2.75	34	13.62	2.56	13	14.38	2.40
	過去参加	44	12.75	2.81	37	12.92	2.82	54	12.54	2.52	30	13.53	2.61
	不参加	65	11.69	3.18	48	13.00	2.52				15	12.33	2.38

Table9 教師能力達成感下位尺度における学年別の群間比較の結果

		1年生		2年生		4年生	
		<i>p</i>	<i>d</i>	<i>p</i>	<i>d</i>	<i>p</i>	<i>d</i>
学習指導と生徒指導	参加—過去参加	.600	.22	.932	.09	.750	.28
	参加—不参加	.896	.09	.980	.04	.271	.57
	過去参加—不参加	.800	.12	.820	.13	.512	.32
生涯発達	参加—過去参加	.282	.32	.432	.30	.267	.55
	参加—不参加	.215	.35	.251	.37	.257	.61
	過去参加—不参加	.999	.01	.951	.07	.963	.08
特性への対応	参加—過去参加	.394	.30	.922	.10	.107	.66
	参加—不参加	.309	.31	.989	.03	.076	1.07
	過去参加—不参加	.998	.01	.834	.13	.873	.15
興味関心、継続性	参加—過去参加	.031	.62	.000	1.08	.489	.39
	参加—不参加	.000	.93	.000	1.10	.213	.66
	過去参加—不参加	.179	.33	.951	.07	.683	.26
連携	参加—過去参加	.892	.11	.570	.24	.566	.33
	参加—不参加	.075	.45	.616	.22	.088	.86
	過去参加—不参加	.169	.35	.990	.03	.293	.47

と過去参加群との間に有意な差が示されたこととなる。

教職課程と課外活動の関連付けと教師効力感、教師能力達成感

現在子どもと関わる課外活動を行っている学生のみを対象とし、教職課程と課外活動の関連付けと教師効力感、教師能力達成感のそれぞれの下位尺度得点との相関係数を算出した (Table10)。なお、この分析ではすべての学年を合わせて分析を行った。その結果、弱い値ながらも正の相関が示された。中でも、「学級管理・運営効力感」と「教授・指導効力感」を除く教師効力感の下位尺度および教師能力達成感の下位尺度においては、統計的に有意な正の相関が示された。

Table10 教職課程と課外活動との関連付けと
教師効力感、教師能力達成感との相関係数

	<i>n</i>	<i>r</i>	<i>p</i>
教師効力感			
学級管理・運営効力感	114	.12	.222
教授・指導効力感	113	.11	.266
子ども理解・関係形成効力感	114	.22	.020
教師能力達成感			
学習指導と生徒指導	112	.35	.000
生涯発達	112	.30	.001
特性への対応	112	.27	.003
興味関心、継続性	112	.28	.003
連携	112	.37	.000

4. 考察

本研究では、教員免許状取得を目指す学生にボランティア活動等の課外活動参加を促す動きがみられる一方で、活動への参加が実際に学生の成長につながっているのかどうかは明らかではない現状を踏まえ、子どもと関わる課外活動への参加と成長との関連について検討を行った。その際、活動への参加を促すといったこれまでも行われている支援以外の支援の提供を視野に入れて、活動参加の有無だけではなく課外活動の経験と教職課程の学習との結び付けを行っているかという点に着目して調査、分析を行った。具体的には、子どもに関わる課外活動への参加状況、教職課程と課外活動との関連付け、教師効力感、教師能力達成感の関連状況を検討した。

子どもと関わる課外活動への参加状況による教職課程と課外活動との関連付けの程度の比較では、4年生以外の学年において有意差がみられ、参加している者はこれまで参加したことがない者よりも関連付けの程度が高いことが示された。この関連付けの問いに回答している者は、子どもと関わる課外活動に参加していないとも、何らかの課外活動には参加している者である。つまり、どちらも課外活動への参加はしている者であるが、子どもと関わる課外活動に参加している者の方が関連付けの程度が高く示されたということは、活動内容によって関連付けの容易さが異なることを示しているともいえよう。本来、直接的に子どもと関わる課外活動ではなくとも、なんらかの形で教職課程における学習内容と関連付けることは可能であると考えられるが、学生にとっては、やはり直接的に子どもと関わる課外活動でなければ結び付けは難しいのであろう。

子どもと関わる課外活動への参加状況による教師効力感の比較では、いずれの学年においても有意差がみられなかった一方で、教師能力達成感の比較では、主に「興味関心、継続性」の得点において、参加している者と参加したことがない者との間に有意差がみられた。教師効力感や教師能力達成感の他の下位尺度については、直接的に教師が子どもと関わる際に必要となる指導力を測定しているのに対して、「興味関心、継続性」については意欲や関心、意識といった面を測定している。このことから、子どもと関わる課外活動に参加することは意欲や関心、意識を高めるうえで有効であるものの、直接的に子どもと関わる際に必要となる指導力についてはそれらが高まることにはつながらないことが示唆された。

他方、子どもと関わる課外活動を行っている者のみを対象に、教職課程と課外活動との関連付けの程度と教師効力感及び教師能力達成感との関連を検討したものでは、関連付けの程度と直接的に子どもと関わる際に必要となる指導力を示す下位尺度に関しても相関がみられた。ただし、学級運営や技術的な学習指導の能力を示す下位尺度に関しては相関がみられなかった。これらのことから、子どもと関わる課外活動に参加するだけではなく、その内容と教職課程における学習の内容について関連付けをすることが指導力の向上にもつながる可

能性が示されたといえる。

5. 総合考察

冒頭に記したとおり、近年、教員養成課程における現場体験が重視される中で、さまざまな大学が教員免許状取得を目指す学生にボランティア活動等の課外活動への参加を促す動きがみられる一方で、それらの活動に参加することによる効果は明らかになっていない。本研究では、教員免許状取得を目指す学生の課外活動に関する研究や子どもと関わる課外活動に限らず全般的な課外活動における発達を捉えようとするこれまでの研究を概観した上で、教員免許状取得を目指す学生の成長を支援するために、課外活動への参加を促すといった支援以外の支援策を検討することを目指し、課外活動と正課の学習との結び付けという点に着目した上で、子どもと関わる課外活動への参加と学生の成長との関連を検討した。

その結果、課外活動に参加することは教職に関連する意欲や関心、意識を高める可能性が示された。一方で、直接的に教師が子どもに関わる際に必要となる指導力の面では成長につながらないことが示唆された。このことは、ボランティア活動への参加が教員採用試験の結果にはつながらないものの、教職に就くことの動機づけを維持させるといった面には影響を与えることを指摘した原・芦原（2006）の研究とも軌を一にするものであると考えられる。参加後の学生を対象として調査を行った研究においては様々な学生の成長が示されているものの、実際には学生の認知上のみ効果であり具体的な成長にはつながっていないことが危惧される。

他方、本研究が学生に参加を促すといった支援以外での支援策を視野に入れて検討した課外活動と教職課程の学習との結び付けについて、参加している学生では結び付けが高い学生の方が直接的に子どもと関わる際に必要となる指導力を含むさまざまな面において高い値を示すという関連がみられた。このことから、ボランティア活動や現場経験といった課外活動への参加を促すだけではなく、結び付けを促すことが学生の成長を支援するためには必要であるといえよう。また、教職課程の授業内において課外活動における経験との結び付けを促したり、課外活動における振り返りで教職課程の学習との結び付けを促したりすることが学生の成長を促す新たな支援策として提供できることが示された。しかしながら本研究では関連を検討しただけであるため、能力の高い学生の方が結び付けを行っているという可能性も否めない。今後は縦断的な調査などで因果を明らかにすることが必要となる。

先述のように、課外活動と発達との関連を検討する研究では、課外活動への参加を複数の視点でとらえることが提案されているが、本研究では活動内容や活動期間、活動頻度、活動への関与度等の影響については検討を行わなかった。内容や参加の程度の違いによって結び付けの程度も異なることや、結び付けを行っていても学生の成長への影響が異なることも考えられるため、今後はより詳細に課外活動参加のあり方を捉えた上で検討を行うことが必要であろう。また本研究において学年による違いが示された点についての理由が明確ではないため、学年による違いについても詳細に検討することが求められる。加えて、本研究はこれまでの多くの先行研究と同様に一大学における研究であるため、他の地域や他の大学でも同様の結果がみられるかどうかについては定かではない。今後はさらに広い対象を含めた研究を行っていくことも課題となるであろう。

石本雄真（鳥取大学大学教育支援機構・教員養成センター）

大谷直史（鳥取大学大学教育支援機構・教員養成センター）

柿内真紀（鳥取大学大学教育支援機構・教員養成センター）

引用文献

Bohnert, A., Fredricks, J., & Randall, E. (2010). Capturing unique dimensions of youth's organized activity involvement: Theoretical and methodological considerations. *Review of Educational Research, 80*, 576-610.

- Busseri, M.A., Rose-Krasnor, L., Willoughby, T., & Chalmers, H. (2006). A longitudinal examination of breadth and intensity of youth activity involvement and successful development. *Developmental Psychology*, 42, 1313–1326.
- Hatcher, J. A., Bringle, R. G., & Muthiah, R. (2004). Designing effective reflection: What matters to servicelearning? *Michigan Journal of Community Service Learning*, 11, 38–46.
- 原田 新・石本雄真・王 松・山根隆宏・日潟淳子・田仲由佳 (2016). 大学生の正課外活動と成長(1)—自我同一性, 汎用的技能との関連から— 教育心理学会第58回総会発表論文集, 480.
- 原 清治・芦原典子 (2006). 実践的教員養成のあり方に関する研究Ⅱ—スクールボランティアと教育実習の関係から— 佛教大学教育学部論集, 17, 81–98.
- 春原淑雄 (2007). 教育学部生の教師効力感に関する研究—尺度の作成と教育実習にともなう変化— 日本教師教育学会年報, 16, 98–108.
- 姫野完治 (2006). 学校ボランティアの活動形態による教職志望学生の学習効果 教育方法学研究, 32, 25–36.
- 石本雄真・原田 新・日潟淳子・王 松・田仲由佳・山根隆宏 (2016). 大学生の正課外活動と成長(2)—正課外活動外との関連付け, 他者との交流と汎用的技能との関連— 教育心理学会第58回総会発表論文集, 481.
- 河井 亨 (2014). 大学生の学習ダイナミクス—授業内外のラーニング・ブリッジング— 東信堂
- 河井 亨・木村 充 (2013). サービス・ラーニングにおけるリフレクションとラーニング・ブリッジングの役割—立命館大学「地域活性化ボランティア」調査を通じて— 日本教育工学会論文誌, 36, 419–428.
- 溝上慎一 (2009). 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す— 京都大学高等教育研究, 15, 107–118.
- 溝上慎一 (2010). 現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ— 有斐閣
- 文部科学省中央教育審議会 (2011). 今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm (2017年1月27日)
- 文部科学省中央教育審議会 (2012). 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm (2017年1月27日)
- 文部科学省教育職員養成審議会 (1997). 新たな時代に向けた教員養成の改善方策について (教育職員養成審議会・第1次答申) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/1315369.htm (2017年1月27日)
- 文部科学省教育職員養成審議会 (1999). 養成と採用・研修との連携の円滑化について (第3次答申) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/1315385.htm (2017年1月27日)
- Rose-Krasnor, L., Busseri, M. A., Willoughby, T., & Chalmers, H. (2006). Breadth and intensity of youth activity involvement as contexts for positive development. *Journal of Youth and Adolescence*, 35, 365–379.
- 嶋田一彦 (2012). 教員志望学生が教育ボランティア活動に取り組むことの教育的価値 教育実践学研究: 山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要, 17, 1–18.
- 進藤聡彦・勢田二郎・澤登義洋・角田 修 (2009). 大学生の教育ボランティアが教育実践力の育成に及ぼす効果 教育実践学研究: 山梨大学教育学部附属教育実践指導センター研究紀要, 14, 139–151.
- 若尾良徳・緩利 誠 (2014). 教育ボランティア活動が教員養成課程の学生の意識・態度に及ぼす影響—初等教育課程と幼稚園過程との比較から— 浜松学院大学教職センター紀要, 3, 95–105.
- 山田剛史・森 朋子 (2010). 学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割 日本教育工学会論文誌, 34, 13–21.